

佳作

ありがとう、生まれてくれて

東京都
早稲田実業学校初等部四年

山口庸可

むねがドキンとした。

二年生がもうすぐ終わる三月の晴れた日、一時間目の音楽の後、担任の岩城先生がわたしを待ちかまえていた。

「赤ちゃんが生まれそうだから帰るじゅんぴして！」

校庭には、お友達のお母さんがおむかえに来てくれていた。パレエやピアノの発表会の前でも、囲碁の対局の時でも、こんなにドキドキしたことはなかった。

その日、おじいちゃんおばあちゃんと父は家の用事で愛知に行っていた。母が今、待っているのはわたしだ。わたしは今、母が頼れる相手はいないんだ。

母はやつぱりわたしを待っていた。わたしが家に着くのを待って、それから一緒に病院へ向かった。

「けいさんぶで七分おき！そく分べん室！」

かんごしさんたちの急ぎぶりで、赤ちゃんが生まれるのが近いことをさとった。そして、母の表情と、母が握っているわたしの手の痛さで。

「オギヤーオギヤーオギヤー」

赤ちゃんは本当に「オギヤー」と泣く。病院に入ってから一時間足らずだった。

その子の人生が始まると同時に、わたしの人生もがらりと変わった。今思うとその泣き声は、それを知らせる鐘のようでもあった。

わたしは、お姉ちゃんになったのだ。

今までは、父も母も食べ物もひとりじめだった。親せきの中でもアイドルだった。それが一気に全て妹へと移ってしまった。

でも、それは、まんざら悪くもない。わたしは、お姉ちゃんだからがまんをする。ゆるる。ゆるる。

「お姉ちゃん、えらいね。」
と、みんながほめてくれる。

「お姉ちゃん、は、妹に名前もつけた。
」愛を結ぶ、と書いて、あゆう。」

本当に、その通りの妹に育ってくれている。

父と母がけんかすると、二人の手をつながせようとす
る。わたしが母にしかられていると、わたしの頭をなでて
「いいいいいこ」と言ったりする。

何の汚れにもごりもない笑顔で、いつも家族中をいやして
くれる。寝顔もかわいくて、見ると二日のいやなことが全部
すうーっと消えていく。

愛を結ぶ子、わたしの妹、あゆう、この家に、わたしの妹
に、生まれてきてくれて本当にありがとう。いつも元気に
笑ってくれてありがとう。いつも家族を楽しませていやし
てくれてありがとう。

いつか、この作文を、自分の目で読んでね、あゆう。本当
にありがとう。